



MONTO

(MONTO WEB版) <http://www-poly.iwate-pu.ac.jp/monto/>

岩手県立大学
総合政策学部ニュース
Iwate Prefectural University
第9号2003.4.7

今号の「MONTO事件簿」は「カラマツ林無届けデモ事件の謎」(8面)



三月十八日に、岩手県立大学および同大学院の学位記授与式が、県立大学講堂で行われた。いずれも二期生となる、総合政策学部卒業生百四名、総合政策研究科・博士前期課程修了生四名が、人生の新たなステージへと一歩を踏み出した。

午後一時半から開催された学位記授与式では、尾形真紀子さんが、総合政策学部卒業生の総代として、西澤潤一学長から学位記(卒業証書)を受け取った。また、午前十一時から開催された大学院の学位記授与式では、

西澤学長から修了生一人一人に学位記が手渡され、総合政策研究科の田中英樹さんが、「本学で学んだことを糧として、これからも自己研鑽に励んでいきたい」と大学院の全修了生を代表して謝辞を述べた。

卒業生有志の企画による卒業記念パーティー(卒業大感謝祭)が開かれた。パーティーでは、ビデオ上映やクイズコーナー、教員への花束贈呈などが行われた。工藤匠さんは、「大学生活で得た先生方や仲間達との絆を、これからも大切にしていきたい」と卒業生を代表して挨拶

した。就職する者、進学する者、今後の進路はそれぞれであるが、この四年間で出来た仲間達との絆を確かめあうよう開演した。卒業生達は学生生活最後のひとときを過ごした。

「卒業生」の言葉が、それぞれに響き渡り、新たなスタートを切る瞬間に、それぞれがそれぞれの未来を思い描きながら、それぞれの道へと歩き出す。

二期生、社会へと巣立つ

問題解決の手がかりは皆さんのポケットの中に

「ふるさと再生特区」構想の一部でもある。通貨の使い方はまだ定まっていないが、糠森さん宅で毎月開かれる「カッパ」の市で使われることが多い。食べ物、飲み物、リサイクル品、サイピスなどを持ち寄り、取引、交換、交流の道具となつて

このメンバーが新しく打ち出したのが遠野茅かやぶきプロジェクトである。地域のごみ取集所の屋根を、まきという計画である。これもまたワーキングホリデー方式にして、平成十四年の十二月、県立大学の学生などが数カ所の茅場を巡って茅を刈り集めた。糠森さんの農場で一冬かけて乾燥させた茅は、十五年の三月、再び集まったメンバーたちによって、立派な茅ぶき屋根になった。

遠野はなぜか都都会の人々を引きつける場所である。ワーキングホリデーに最初参加した学生が、いっしょに参加していた。また、遠野は全国から多くの研究者を引きつける場所でもある。だいいじなことは、研究の成果を世話になった人たちに現場に戻すことだろう。これは学生も研究者も同様である。とくに遠野は県立大講義の動きがあった土地でもある。ワーキングホリデーを通じて、遠野の人々と大学、学生たちとのよい関係が長く続くことを願っている。

「卒業生」の言葉が、それぞれに響き渡り、新たなスタートを切る瞬間に、それぞれがそれぞれの未来を思い描きながら、それぞれの道へと歩き出す。

「卒業生」の言葉が、それぞれに響き渡り、新たなスタートを切る瞬間に、それぞれがそれぞれの未来を思い描きながら、それぞれの道へと歩き出す。

「学生を農家にあずけてみるか?」遠野ふるさと公社のディレクター徳吉英一郎さんが、いきなり切り出した。私の担当する「学の世界入門・基礎教養入門」(一年次)では、クラス全員で学外にでかけ、泊まり込みで地域や環境の調査をおこなっている。場所とテーマ、旅行計画も学生が決める。平成十四年の五月末、遠野の地域活性化をテーマに掲げた学生が徳吉さんに取材交渉の電話をかけたところ、右のような提案が連に返ってきた。

遠野ではグリーンツーリズムの一つとして、客が農家に泊まりながら農作業を手伝い、対価として食事代と宿泊費はただになるという「ワーキングホリデー」を、ちょうど始めるころだった。予定とはちがったが、地域から学ぼうとする学生が、この機会をのがすわけにはいかない。こうして五人の学生が、本格的に始まった遠野ワーキングホリデーの最初の参加者となった。



お世話になった先は、リンゴ農家の糠森隆さんと牛飼いの農家の川島重紀子さんである。糠森さん宅ではリンゴの摘果を、川島さん宅では牛小屋の堆肥出し、薪割り、草刈りなどを手伝った。かなり体力と根気を伴う作業である。

わすか二日間だったが、頑つきがかつたといわれる学生がいた。ふだんは体の具合が悪いのではないかと思えるほど無口だった学生が、ずいぶんと饒舌にもなった。

稲刈りや草刈りなど、かなり体力と根気を伴う作業である。わすか二日間だったが、頑つきがかつたといわれる学生がいた。ふだんは体の具合が悪いのではないかと思えるほど無口だった学生が、ずいぶんと饒舌にもなった。

稲刈りや草刈りなど、かなり体力と根気を伴う作業である。わすか二日間だったが、頑つきがかつたといわれる学生がいた。ふだんは体の具合が悪いのではないかと思えるほど無口だった学生が、ずいぶんと饒舌にもなった。

ワーキングホリデーin遠野

地元の人たちとの共同作業や交流から学び、地域への還元をめざす取り組み

「卒業生」の言葉が、それぞれに響き渡り、新たなスタートを切る瞬間に、それぞれがそれぞれの未来を思い描きながら、それぞれの道へと歩き出す。

「卒業生」の言葉が、それぞれに響き渡り、新たなスタートを切る瞬間に、それぞれがそれぞれの未来を思い描きながら、それぞれの道へと歩き出す。

「卒業生」の言葉が、それぞれに響き渡り、新たなスタートを切る瞬間に、それぞれがそれぞれの未来を思い描きながら、それぞれの道へと歩き出す。

「卒業生」の言葉が、それぞれに響き渡り、新たなスタートを切る瞬間に、それぞれがそれぞれの未来を思い描きながら、それぞれの道へと歩き出す。

平塚 明



川島さんご一家。この広大な土地に牧場をつくらうとしている。

花蝶風

歌人・依万智に、教室にそれぞれの時光たしおる九十二個の目玉と想、へうやうと名前覚えし子ども表情を持つ」というのがある(「サラダ記念日」一九八七年、河出書房新社)。高校教師時代の経験を詠んだものであるが、授業を受ける集団としての生徒にもそれぞれ個性があること、教師と生徒の関係が「対一であること」を示している。三月、総合政策学部から百四名の二期生が巣立っていった。これから進む道、それぞれ異なるけれど、四年間通った総合政策学部という「苗床」は一緒である。ここで得たことや学んだことにはそれぞれに異なるところがあるだろうが、学部で過ごした時間は共有である。四月、百名余りの六期生が新たに「苗床」に加わった。これから四年間、共に勉強して時間を共有して行くわけだが、この総合政策学部で出会ったのである。一方で、先輩や教員にこの「苗床」でめぐり逢う総合政策学部は各学年百名定員である。「一言で百人」といって人は「百人十色」であるから、まさに「百人百様」である。それぞれが個性を持つ。考え方も異なるけれど、それぞれの生き方もそれぞれである。あたりますことではあるが、筆者などは受講者の多い講義ではともすれば学生を集団としてとらえて、この「百人百様」を忘れる場合がある。大学が教育機関であること考えた時この「百人百様」は重要で、側面を尊重することは教育の基本である。とはいえ学生一人一人に見合う教育を行うことは理想であるが、その実行には限界も存在する。施設の問題、教員の人数や時間的制約、学内外の仕事等々、学部の教育理念の一つは「少人数教育」である。個別対応の教育の実現には一定の限界があるとしても、これは学生の顔の見えの関係を作り上げる方法の一つである。もちろん、すべての科目を少人数で行うことは無理であるが、いわゆる「ゼミ」と呼ぶ演習科目は「一年次」「入門ゼミ」、二年次は「基礎ゼミ」、そして三年次以降の「専門ゼミ」とあり、すべて少人数である。われわれ教員もこの新しい期に入生は、もちろんゼミ、ゼミを通して、それぞれの表情を持つ「学生たち」の新たな出会いの時でもある。

岩手の「潜在力」に学ぶ。

恵まれた自然、固有の歴史文化など、「環境首都」を目指す岩手は、大都市圏にはない「豊かさ」を持つ県である。潜在力豊かな岩手をフィールドに、四人の学生たちが出会い、学び、感じたことは……。信夫助教、脇田助教、脇田助教を交えて、学生たちが率直に語り合った(学生は平成十四年度のもの)。

出席者 尾形真紀子 総合政策学部四年

紺野 宙生 総合政策学部四年

菊地 一昭 総合政策学部三年

藤原 裕一 総合政策学部一年

司会 信夫 隆司 総合政策学部助教

脇田 健一 総合政策学部助教

解決方法は一つじゃない

脇田 今日集まってもらった四人は、岩手のさまざまな「環境」課題に取り組み始めた。または取り組みの真っ最中にある人たちです。まずは地元銀行に就職が決まった紺野さん、卒論のテーマは何でしたか。

紺野 出身地である住田町の町おこしについて、その現状と今後の課題を調べました。住田町は三十年ほど前から、基礎産業である林業を活かした町づくりを進めているんです。

脇田 あえて出身地の住田町を選んだのはなぜですか。紺野 林業を活かした施策は全国的に注目されているのに、実際のところ町には活気がありません。このギャップはなんだろうと思ったことが一つです。そ



紺野宙生さん

脇田 生産から加工まで、町の林業がトータルで利益を上げられる仕組みをつくらうとして

いるわけだね。紺野 ええ。町では「川上から川下へ」と呼んでいます。最近

いま取り組んでいるのはごみ問題。でもと大量生産、大量消費の社会のあり方に疑問を感じていて、循環型社会を実現するためのにはどうしたらよいかという思いが取り組みのきっかけでした。そこで信夫先生に相談したら、もっと身近な地域の

尾形 盛岡市八幡町にある消防団第四分団屯所(八幡町番屋)を題材に、老朽化した歴史的建造物を巡る多様な価値観と合意形成を分析しました。

尾形 建設物としての価値から見たら「保存」という選択にならざるを得ないのが、結局、その建物にかかわるのは「人」です。人と人の対話のなかで決めた選択なら、保存にしろ解体にしろ、そこに町にとつての「価値」が生まれるのではないかと。どっちつかずの逃げの答えもありませんか。

尾形 いや、私もその辺に真摯があるように思います。尾形 町の人が「学生さんが勉強にきたら」と思われるのが嫌だったので、番屋のお祭りにも参加して、毎日真剣に太鼓の練習に参加したんです。卒論の勉強のためというよりは、町の人たちに話を聞きに行こうという気持ちでした。好きだからそこまでしたんでしょうね。

信夫 これからは海外を歩くときも、景観や建造物に対する見方が変わるのではないのでしょうか。海外に行った経験はあるんですか。尾形 二年生のときに一カ月間南ドイツやフランスを回り、歴史的な街並みもたくさん見ました。帰国後、それまで「ただそこにあって」だった岩手山の景色や歴史的な建造物が、「盛岡の人たちは、ここから見ると、岩手山の風景が大切だと思って、今日までこの景観を守ってきたんだな」と思うようになりました。



脇田健一さん

信夫 岩手県は「生物資源」で、化石燃料に対して「生物燃料」といわれるものです。「木質バイオマス」とは、薪、炭、チップのほか、樹皮、林地残材など文字通り木を使った燃料のことです。すでに私の出身地の花巻市でも温水プールの燃料として使われてきました。

脇田 製材過程で出る樹皮や端材の有効利用は林業振興につながり、石油の代替エネルギーとしての価値もあります。木質バイオマスの抱える課題は、工業技術、経済、環境、行政、さらには日本人のライフスタイルなど、さまざまな分野が関連しています。社会の循環のなかで考えなくてはならない、まさに総合政策的な視点が必要なテーマだと思っただけです。

脇田 尾形さんは卒論で何をテーマにしましたか。尾形 盛岡市八幡町にある消防団第四分団屯所(八幡町番屋)

信夫 最終的にどんな結論を出したのですか。尾形 建設物としての価値から見たら「保存」という選択にならざるを得ないのが、結局、その建物にかかわるのは「人」です。人と人の対話のなかで決めた選択なら、保存にしろ解体にしろ、そこに町にとつての「価値」が生まれるのではないかと。どっちつかずの逃げの答えもありませんか。

信夫 これからは海外を歩くときも、景観や建造物に対する見方が変わるのではないのでしょうか。海外に行った経験はあるんですか。尾形 二年生のときに一カ月間南ドイツやフランスを回り、歴史的な街並みもたくさん見ました。帰国後、それまで「ただそこにあって」だった岩手山の景色や歴史的な建造物が、「盛岡の人たちは、ここから見ると、岩手山の風景が大切だと思って、今日までこの景観を守ってきたんだな」と思うようになりました。



尾形真紀子さん

信夫 これからは海外を歩くときも、景観や建造物に対する見方が変わるのではないのでしょうか。海外に行った経験はあるんですか。尾形 二年生のときに一カ月間南ドイツやフランスを回り、歴史的な街並みもたくさん見ました。帰国後、それまで「ただそこにあって」だった岩手山の景色や歴史的な建造物が、「盛岡の人たちは、ここから見ると、岩手山の風景が大切だと思って、今日までこの景観を守ってきたんだな」と思うようになりました。

信夫 これからは海外を歩くときも、景観や建造物に対する見方が変わるのではないのでしょうか。海外に行った経験はあるんですか。尾形 二年生のときに一カ月間南ドイツやフランスを回り、歴史的な街並みもたくさん見ました。帰国後、それまで「ただそこにあって」だった岩手山の景色や歴史的な建造物が、「盛岡の人たちは、ここから見ると、岩手山の風景が大切だと思って、今日までこの景観を守ってきたんだな」と思うようになりました。

信夫 これからは海外を歩くときも、景観や建造物に対する見方が変わるのではないのでしょうか。海外に行った経験はあるんですか。尾形 二年生のときに一カ月間南ドイツやフランスを回り、歴史的な街並みもたくさん見ました。帰国後、それまで「ただそこにあって」だった岩手山の景色や歴史的な建造物が、「盛岡の人たちは、ここから見ると、岩手山の風景が大切だと思って、今日までこの景観を守ってきたんだな」と思うようになりました。



藤原裕一さん

信夫 これからは海外を歩くときも、景観や建造物に対する見方が変わるのではないのでしょうか。海外に行った経験はあるんですか。尾形 二年生のときに一カ月間南ドイツやフランスを回り、歴史的な街並みもたくさん見ました。帰国後、それまで「ただそこにあって」だった岩手山の景色や歴史的な建造物が、「盛岡の人たちは、ここから見ると、岩手山の風景が大切だと思って、今日までこの景観を守ってきたんだな」と思うようになりました。

信夫 これからは海外を歩くときも、景観や建造物に対する見方が変わるのではないのでしょうか。海外に行った経験はあるんですか。尾形 二年生のときに一カ月間南ドイツやフランスを回り、歴史的な街並みもたくさん見ました。帰国後、それまで「ただそこにあって」だった岩手山の景色や歴史的な建造物が、「盛岡の人たちは、ここから見ると、岩手山の風景が大切だと思って、今日までこの景観を守ってきたんだな」と思うようになりました。

学生による「環境」課題への取り組み

尾形真紀子さん(四年生)

三年次の地域調査実習で「盛岡市の歴史的建造物の保全」というテーマに関心を持ち、卒論研究でもフィールドワークを続けてきました。現場に足を運んだ回数は数え切れず、大学よりも熱心に通っていたかもしれません。卒論研究では、盛岡市の八幡町番屋という消防施設の保存・解体を繰り返してきました。身近で起きている問題を自分なりの視点から見えていくことで、多くのことを学んだと思います。

紺野宙生さん(四年生)

私が、卒業論文で住田町の林業を活かした町おこしを対象に選んだきっかけは、出身地である住田町が活気を取り戻すために取り組んでいた、町おこしというものがどのようなものかという疑問を感じたことでした。卒論を通じて、一番強く感じたことは、世の中には本当に、夢の実現に向けて苦戦と戦っている、熱意のある人物が存在するのだということ。聞き取り調査を通して、いろいろな方の本心や、熱意に触れることができたということに、素直に喜びを感じざるを得ませんでした。

菊地一昭さん(三年生)

信夫先生に所属して、「ごみ廃棄の社会的要因とリサイクル社会実現に向けた課題」について研究を進めています。岩手県でもこの問題は深刻になっています。岩手・青森県境で日本最大の産業廃棄物不法投棄事件が発生しました。地域住民の生活は、大量の産業廃棄物により脅かされています。この事件は、「大量消費、大量生産、廃棄社会が私たちの生活や自然環境を蝕んでいく事実を示しています。私は、このようなごみの問題を経済システムやリサイクルシステム、環境問題という視点から研究を進めて行きたいと考えています。現在は、文献や資料集めに奔走していますが、春からは処分場や不法投棄現場のフィールドワークも行い、地域住民の皆さんの意見も伺おうと思っています。

藤原裕一さん(二年生)

私が興味を持っているのは、「木質バイオマス(生物資源)」ということです。岩手県は森林が多いため、木材資源が豊富にあります。しかし、その資源が有効に活用されていないのが現状です。その原因が何によるものか、資源を有効に使うにはどのようなべきなのか、これらのことに様々な学問領域からの総合政策的なアプローチを試みたいと考えています。そのために、様々な科目・教員が充実している総合政策学部の特徴を最大限に活用することが学生生活のキーワードだと思います。

とは、単に「モノ」を保存する
ことでなく、人々の取り組みの
なかで日々つくり、守られて
きた結果であるというプロセス
が見えてきた。地元銀行
に就職が決まった紺野さんは、
ぜひ地域の潜在能力を見極め、
融資すべきときには融資してほ
しいな(笑)。銀行の採配によ
って地域の力が引き出されるこ
とがあるのだから。

紺野 銀行も企業である以上、
自らの利益を守らなくてはなら
ない。僕は卒業して考えたのは
ず、僕は卒業して考えたのは
時に相対するかもしれない職場
で働くわけです。でも、卒業研
究でお世話になった地元の方や
林業関係者のなかには「銀行に
君のような考えを持つ人がいる
ことはいくらも」と言ってく
れる方が少なくありませんでし
た。

脇田 総合政策学部で学んだか
らには、経済開発だけでなく、
人間開発、地域開発など、いろ
んな視点で、地域の潜在的な
力を引き出してほしいですね。

自分で総合政策をつくる
脇田 菊地さんは社会人だけに
明確な問題意識を持って入学さ
れたわけですが、学内の若い世
代をご覧になって、どう思われ
ますか。

菊地 ひと言で言うと、まじめ
で行儀がいい。テスト前も手堅
く勉強し、こちらが教わるくら
いに欠けるかな。
信夫 一年生の藤原さんは、先
輩達を見ようと思う?

藤原 一年生の間ではよく「総
合政策って、何をしたらいいの」
という話が出ます。でも、今日
出席した先輩達は、自分のなか
で「総合政策」をつくっている
気がしました。自分で問題をつ
くり、学び、自分なりの「総合
政策」の視角、をつくりあげてい
る点がすごいと思います。

尾形 藤原さんは高校在学時か
ら木質バイオマスに興味を持っ
ていたそうですね。総合政策学
部に進んでから、同じ対象物に
対する見方は変わりましたか。

藤原 ええ、高校生のときは木
質バイオマスの使われ方や海外
の事例など、その特徴だけを漠



佐藤隆司さん

然と見ることでしかできません
でした。もっといろいろな分野に
結び付いていく問題であること
がわかったのは、総合政策学部
で住田町などの現場調査に行くよ
うになってからです。

脇田 総合政策学部の売りは、
現場密着。藤原さんのように具
体的なケースや関心を持って
いる方が少ないかもし
ないね。

尾形 目的意識だけでなく、や
はり現場にいる人たちの声や思
いを聞くことは大事だと思います。
現場の人たちとつながりが
できると、変な論文を書いたら
申し訳ないとプレッシャーも増
すのですが、自分が見ている
ことが人の役に立てればうれし
い。自己満足だけの解決でよし
とするなら、肌荒れしてまでが
んばれませんよ(笑)。

紺野 本音はさうだね。
信夫 今日出席している皆さん
のように目的意識が明確な学生
が多い一方で、何も見つからな
いという学生も少なくありません。
きっかけをつかむにはどうし
たらいいのかな。

尾形 あらかじめ目的を持つこ
とに越したことはないかもしれ
ませんが、学ぶ過程で目的や興
味の対象が変わることも悪いこ
とでは無いと思うのですが。

藤原 確かに、僕もほとんど変
わってきました。
尾形 たくえん入学当初に明確な
目的があったら、総合政策学部
には先生方と現場に行く機会が
たくさんあります。受け身にな
らずに率先して飛び出していく
姿勢であればとてもおもしろい
学部だし、そうしたなかで「こ
れだ」というテーマに出あえ
るのではないですか。

私は入学前に、現場にワイ
ドバックできるような勉強をし
たいということ、若手のこと
を知りたいという二つの目的が
ありました。でも、具体的な対

象は決まらなかったんです。入
学後、先輩や先生方に付いて現
場に出ながら、おもしろいと思
ったことにすぐ飛びつくように
しました。それを繰り返すうち
に歴史の建造物というテーマに
焦点が定まりました。

信夫 社会や地域、政治の仕組
みを、現場に入って学べるのが
総合政策学部ならではのよさ
じゃないかな。例えば「母親」は
環境学や地理学でも学べるけれ
ど、地域の条例を中心に見るこ
とはない。総合政策という視点
のなかで、個別の視点を取り上
げていくおもしろさがあると思
います。

尾形 藤原さんの話にもあつた
ように、後輩からはよく「総合
政策って何をやるのかかわら
ない」と聞かれます。私も藤
原君の「自分にとっての総合政
策」という考えに非常に共感
するのですが、総合政策とは何
かを学部や先生に求めてもわか
らない、実のところ学生自身で
思っています。「自分にとって
総合政策」を探そうという、県
立大学総合政策学部だと思っ
てです。

岩手という軸足を持つ
脇田 尾形さんは新聞部を「か
ら立ち上げたり、他大学との

「政策・情報生交流会」への参
加に取り組んだり、四年間県
立大学のリーダーシップをとっ
てがんばってきたよね。それは
総合政策学部の学生であつたこ
とが関係しているのかな。

尾形 どうでしょう。伝統がな
い、先輩がない、小さい大学
であるなどの特徴は、マイナ
スにもとれることかもしれない
です。でも、私は自分のやりたい
こと、自分がやれることをやっ
てきて、ゼロからつくりあげて
いくプロセスを楽しめた四年間
だったなと思っています。とて
も充実した四年間です。

信夫 総合政策学部で身につけ
た目的意識や問題意識は、就職
活動でも役立ちましたか。

尾形 就職の目的は、面接で質
問されたら失敗を重ねるなかで
徐々に明確になってきた気がし
ます。私は何か人の役に立てる
仕事が、人として思っていたの
ですが、人の役に立つとはどう
うことかという「実感」はでき
ていなかったんです。そこで、
東京の人材開発会社で、一カ月
インターンシップを経験しまし
た。企業の採用活動のアウトプ
ットやインターンシップの
コーディネーターをする会社で、
結果的にそこに就職が決まりま
した。

脇田 県立大に入学する前と比
べて、自分が変わったと思うと
ころはありますか。

紺野 僕は高校卒業時の就職試
験に落ちて進学に転向したので
すが、落ちたことが(笑)
い。四年前の自分と比べると考
え方の幅も広がって、深さも増し
ました。入学当初は先生方の研
究室を訪ねただけで泣きそうな
ほど緊張していたのが、積極的
に前に出るようになっていくな
りになったと思います。

菊地 大学に入ってから、自分
の考えは極端だったことに気づ
きました。以前は常に、社会的



紺田健一さん

に抑圧されている人や社会的弱
者の側に立って考えなくてはと
思っていたんです。もちろんそ
の視点は大事ですが、いまは何
かをするときに、どっちが良い
悪いと簡単に色分けすることが
できないと思うようになりました。
問題から距離をとり、良い
面と悪い面の間に立って、両面
を見ていくということ、脇田
先生の授業で教わりました。日
の前の人の苦しみも大切だけど、
そういう人を生み出している社
会全体の仕組みを見て考えるこ
とも必要だね。

脇田 尾形さんの考え方も重
なる点ですね。社会的弱者も歴史
的建造物も、単純に大事にしな
さい、守りなさいだけでは解決
しない問題です。相対化したと
ころから対象を見ることも大事
なことだということですね。

信夫 菊地さんは、大学の勉
強が仕事にも活かしていると感
じますか。

菊地 これまで仕事ではさま
ざまな問題に直面し、そのつど生
半可な知識で答えを出してきた
ので、もう少し基礎を学ぼうと
思っていました。この三年
間で学んだことは多くありますが
が、具体的な成果というとな
だこれだからでしょうか。先ほ
ど話したように、両者の間に立
たものの見方、考え方が身に付
いたことは私にとって大きな取
得です。

信夫 僕や脇田先生のようなマ
ンモス私大育ちにとっては、岩
手県立大学は実にうらやましい
学習環境にありますよね。少人
数で、先生に手取り足取り教え
てもらえる(笑)。

脇田 おもしろいフィールドが
たくさんあるよね。
尾形 確かに、自分の興味も漠
然としているときに、岩手と
いう環境で起きていることに目
を留めてみると、ヒントが合っ
てくるように思います。それも
岩手の「豊かさ」なのかもしれ
ません。他大学の総合政策学部
の学生と話をしていると、私た
ちにはずいぶん「岩手」という
「軸足」が確にあるという気が
するんです。

岩手は「コミュニティ・ビジネスの宝庫だ。なかでも女性
の活躍は目をみはるものがある。遠野市横綱「縦綱夢を映
かせる女性」の姿は、地域婦人十八人で組織される生活改
善グループによる活動だ。まずは農家婦人の切実な要求
である「田んぼのなかにトイレ」を設置させ、続いて女性
の生きがいの場として「企業組合・縦綱夢咲き茶屋」を設
け、十三年度には五十万円の収入を得て農家婦人の副業の
場を確保した。その後、次々と農村女性がかかえる問題
解決に取り組んできた。喜喜町高家領の「森のそば屋」支
十二人の女性による「高家領水車母さんの会」によって支
えられ、その後新たなグループを組織して「みちの驛」
を立ち上げ、兼業に活躍する主婦たちの副業の場を確保する
と共に、衰退しつつある多品目少量生産の農業を支える産
直市仕組みも創り出した。一矢中さんや豊一は新住民の主
婦平野さんが、農家のみなさんと共同で組織し、メロンの
栽培体験や、農家が穫れすぎて捨てられようとしていたシ
ヤブを自分たちで売りさばくなどの活動を経て、町内のシ
ョッピングセンター内に「矢中百姓倶楽部」を設置させ、
都市近郊農業の活性化に貢献してきた。また、他地域との
交流市「矢中やハーフ市」など、町の活性化にも大きな役
割を果たしている。

岩手は男性も頑張っている。理市町の「大沢農村振興会
は伝統的な集落にあって、青年会の提案のもと自治会と
連携し、集落住民全員で組織されている。出稼ぎを少なく
し、皆が生き生きと暮らせるよう、農業の共同作業からは
じまり、ハウスクリーニング、農機具の提供と交流を手助け、
町が設置した交流拠点の委託だけで一億円を上回る収入を得
ている。若岩町「よつげ市場組合」も、集落有志で農協
依存の農業から脱却して、生産と流通を主体的に運営する
目的で、他地域の農業との差別化を目的とした有機栽培農
業と栽培作目の拡大を実現する拠点として「よつげ市場」
を設置した。集落の全戸が組合員で、非組合員も
組合員と同じ手数料で出荷できることから、この市場は集
落全体にとって有効だ。食農コーナーでは女性がフレッ
クスで就業できるから、立派な副業にもなっているうえに、
女性や高齢者が面接収入を得ることができると、家庭
内での地位が高まり、気分的にも活性化が果たされている。
このほかに、岩手には地域資源を活かして協働で取り
組む優れた生き甲斐のある仕事づくりの事例は少なくない。
誇りを持って、岩手の地域資源と人を見つめてほしい。

◎岩手の「コミュニティ・ビジネス」 山田晴義

岩手は「コミュニティ・ビジネスの宝庫だ。なかでも女性
の活躍は目をみはるものがある。遠野市横綱「縦綱夢を映
かせる女性」の姿は、地域婦人十八人で組織される生活改
善グループによる活動だ。まずは農家婦人の切実な要求
である「田んぼのなかにトイレ」を設置させ、続いて女性
の生きがいの場として「企業組合・縦綱夢咲き茶屋」を設
け、十三年度には五十万円の収入を得て農家婦人の副業の
場を確保した。その後、次々と農村女性がかかえる問題
解決に取り組んできた。喜喜町高家領の「森のそば屋」支
十二人の女性による「高家領水車母さんの会」によって支
えられ、その後新たなグループを組織して「みちの驛」
を立ち上げ、兼業に活躍する主婦たちの副業の場を確保する
と共に、衰退しつつある多品目少量生産の農業を支える産
直市仕組みも創り出した。一矢中さんや豊一は新住民の主
婦平野さんが、農家のみなさんと共同で組織し、メロンの
栽培体験や、農家が穫れすぎて捨てられようとしていたシ
ヤブを自分たちで売りさばくなどの活動を経て、町内のシ
ョッピングセンター内に「矢中百姓倶楽部」を設置させ、
都市近郊農業の活性化に貢献してきた。また、他地域との
交流市「矢中やハーフ市」など、町の活性化にも大きな役
割を果たしている。

自分のペースで楽しみつつ いつか「青東駅伝」に 出場したい

陸上部 部長
2年生 齋藤陽一さん



古代オリンピックに起源を誇る陸上は「スポーツの花形」と言われ、世界でもっとも人気ある競技のひとつ。わが県立大でも同選手とは同時に陸上部が設立され、現在は約三十人の学生が在籍している。この集団をまとめるのが、総合政策学部2年の齋藤陽一さん。部長としてはもちろんだが、昨年の春期陸上大会では一般の部で実業団選手に混じって堂々五位に入賞するなど本格的な長距離選手としても部の牽引役となっている。「小さい頃から走るのが好きだった」という齋藤さんが、本格的に競技を始めたのは中学時

代。三年生の時は県大会で入賞を果たすなど、本人いわく「大きくレベルアップした時期」だった。しかし高校では決められたメニューをこなすだけの練習で、思うような記録を残せなかつたという。のびのびした練習をしてみたい。そう願っていた齋藤さんにとって、県立陸上部の自由な雰囲気はまさに理想的な環境だった。それは前述した春期陸上での好成績に現れているといえるだろう。

齋藤さんの現在の練習メニューは、毎日1〜2時間のランニングと校内のトレイルランニングでの軽い筋力トレーニングが中心。たった一人での練習は大変だが、昨年、中学の二年間を過ごしていた緑から釜石市の駅伝チームに参加したことが大きな励みになったらしい。「一時間のやりくりなど、みなさんに見習うところは多い。刺激になるし、なにより精神的に支えられています」と語る。そんな気心の知れた仲間とともに昨年は日報駅伝へエントリー。第一区を快走した。競技を続けるコツは、程よく体を酷使し、程よく楽しむこ



と「齋藤さん」部の活性化を図ろうと週一回の合同練習時間も設けたが、それを後輩に強制することはしたくないと言っている。「県立陸上部の歴史を作ってくれるような人が来れば嬉しい」と、部長としての夢も忘れていない。そんな齋藤さん自身の「夢」は、在学中に世界最大規模の駅伝である「青東駅伝」に出場すること。今秋のロードレース大会の記録次第というが、夢の叶う日はそう遠くないだろう。

水泳を楽しみながら 部としての充実をはかりたい

水泳部
3年生 江刺家裕子さん



三年生の江刺家裕子さんが水泳を始めたきっかけは非常にユニークだ。江刺家さんが幼稚園の頃、両親は彼女にバレエを習わせようとした。そのドライブの途中、たまたま江刺家さんの目に飛び込んで来たのがスイミングクラブのイルカのマーク。「ここに入りたい」と彼女が言ったため車は行き先変更、そのまま入会してしまっただけという。結局、江刺家さんは自分の進むべき道を無意識に選んでしまった。小学四年生で選手になったから各種水泳大会の学童の部

では常に上位三名以内に名を連ね、五年・六年生では小学生における岩手県の十傑に選ばれるインターハイの強化選手にもなった。中学三年の県体育大会では堂々一位を記録し、中学水泳選手の名に輝いた。中学水泳大会の上位にランクインすること、その活躍は変わらない。「でも、今はエンジョイスイマーなんです」と江刺家さんは言った。高校のインターハイが終わった時点で競技選手としてのけじめをつけ、今は純粋に泳ぐことを楽しんでいるそう。実際水泳部に入部したのも「部活はもう大嫌いなんで」という理由。あう仲間には多い。小学校時代から十年以上記録の眼界に挑戦し続けて来た江刺家さんだからこそ、その環境がとて心地よくつたのだ。

とはいえず、江刺家さんには今年で創立五年目という部の運営メンバーとして苦労した部分があった。「参考にする部分がないから行事の組み立てが大変



で、OB会が出来なかったのが心残りです」と言う。今は後輩への業務の引き継ぎも終わり、やっとなら泳ぎたいところだが、「今後は確立されていない部分をきっちりとしていければいい」と話は続く。水泳部のパイオニアの一人として、江刺家さんにはまだまだやるべきこと、やりたいことがあるようだった。

サッカーの醍醐味は 試合に勝った時のうれしさと 出会いの喜び

女子サッカー部 部長
3年生 坂本麗さん



日本でも女子のサッカーチームが結成され始めたのは一九七〇年代あたりからといわれている。当初はクラブチームや一部の大学に女子サッカー部がある程度だったが、一九八九年に行われた、一九八九年には日本女子サッカーのトップリーグ「エリートリーグ」が開業。現在ではクラブチームを中心に各地の大学にもちろん高校にも女子サッカー部が存在し、競技人口は確実に増えてきている。本学でも去年の秋、有志による女子サッカー部が誕生。その初代部長をつとめる総合政策学部三年の坂本麗さん

が結成されたのは一九七〇年代あたりからといわれている。当初はクラブチームや一部の大学に女子サッカー部がある程度だったが、一九八九年に行われた、一九八九年には日本女子サッカーのトップリーグ「エリートリーグ」が開業。現在ではクラブチームを中心に各地の大学にもちろん高校にも女子サッカー部が存在し、競技人口は確実に増えてきている。本学でも去年の秋、有志による女子サッカー部が誕生。その初代部長をつとめる総合政策学部三年の坂本麗さん



は、クラブチーム「盛岡ゼブラレイズ」にも所属するプレイヤー。ポジションは左のMFと、名実ともに女子サッカー部の司令塔的存在である。中学時代はソフトボール部だった坂本さんは、高校でサッカー部に所属。「十一人もいたらレギュラーになれるかな」と思っかけて話を話す。しかし当初は高校の三年間でやるつもりだったサッカーも、県リーグで「盛岡ゼブラレイズ」と対戦、その圧倒的な強さに衝撃を受けて卒業後は迷わずクラブへの入部を決めた。現在クラブでの練習は週に三日だが、夏場には毎週末のように行われる「大会でも私にあって、ゼブラは勉強の場だから」と言う坂本さん、部長を引き受けたのも「私にも何か教えることができた」と思っただけだったそう。こちらでの練習は週に一回ほど

夢は高校で果たせなかった 国体出場 来年こそ出たいです

硬式テニス部
1年生 藤原江里さん



ラケットでボールを相手コートに決められたエリア内に打ち込むテニスは、非常にシブシブなスポーツに思える。しかしボールを決めるためには多彩なショットでラリーのペースを変えたり相手の打点を変えるため配球を考案するなど、試合の組み立てやかけひきを常に考えていなければならない。だがそんな技を使いこなすことが、テニスの醍醐味ともいえるそう。藤原江里さんも高校でテニスの楽しさに目覚め、自ら本学の硬式テニス部のドアを叩いた一人。

まだ一年生ながら上級生に混

じって数々の試合にも出場し、最も将来を期待されているプレイヤーである。藤原さんの競技歴は中学の軟式テニスに始まる。硬式テニスに変更したのは、進まず地元大迫の高校にたまたま硬式テニス部しかなかったのが理由だったが、「ここで硬式の楽しさを知ったんです」と言う。高校時代はキャプテンをつとめ、インターハイにも二年連続して出場するほか数多くの記録を残した。本学でも昨年の新人戦で東北女子の部での優勝をはじめ、夏季大会では三位、また団体戦でも県立大を二位に導いた立役者の一人として、その活躍はめざましい。

本学硬式テニス部の雰囲気は「部活」ともいえず、藤原さん。「高校では勝りたいからとばかり練習あるのみでしたが、大学では決まらな感じ」と微笑む。先輩や仲間と和気あい



あ、好きなテニスを楽しんでいるという印象だ。しかしその一方で「上達するしないも自分の努力次第」と、数々の記録を持つプレイヤーの顔もぞかせた。部活は週に三回だが、藤原さんは折をみて地元に戻り、母校の高校のコートで後輩やテニスを通して知り合った社会人と練習を行っているそう。これは高校時代からずっと続けていた、藤原さんなりの強化メニューである。そんな藤原さんの夢は国体出場。「高校では決勝で負けたので、来年こそ出たい」と話す口調は強い。笑顔の中に秘めた情熱を感じた一瞬だった。

総合政策学部のアスリートたち

サークル活動を行うことで、学生生活はさらに充実します。中でもスポーツは試合に勝つ嬉しさや仲間との連帯感など、様々な感動を与えてくれるもの。総合政策学部でも数多くの学生がサークルでスポーツを楽しんでいます。今回はとりわけ活躍がめざましい四人のアスリートをご紹介します。(学年は平成十四年度のもの)

「研究最前線」

循環・共生・抑制の思想と実践

南 博方



豊島産廃現場の見学

「行政法」の講義で、香川県豊島産廃不法投棄事件に触れたところ、早速、現場の見学をしたいと申し出があった。学生諸君は、朝五時半に盛岡駅に集合し、電車で午後三時すぎ高松駅に着いた。諸君を出迎えて、香川県庁を訪れ、豊島産廃物等処理事業と直島エコタウン構想の詳細な説明を聞いた。豊島の産廃を全量撤去して、直島に搬送し、リサイクルするという空前の大規模事業だ。産廃物の全量を中間溶融し、無害化、有用化するには、今後十年かかり、事業費は、五百億円に上るといふ。学生諸君から、驚くほどの確な質問や意見が次々と出された。

産廃の過疎地への越境投棄

豊島は、瀬戸内海の小豆島の西に浮かぶ小島である。かつては、「福祉の島」「オリーブの島」と呼ばれた。その島へ、昭和五十年ごろから、大量の産廃が不法に搬入、投棄された。すべて大都市圏から排出された産廃物だ。その量は、六十万トンを超える(写真②)。



写真① 石井県議の説明を聞く見学者。後ろは、防水シートに覆われたゴミ。

これは、よそことではない。青森・岩手県境に不法投棄された産廃は、豊島の産廃量をはるかに上回る。その量は青森県側が六十七万立方メートル、岩手県側は十五万立方メートルに及び、豊島の産廃量の倍に当たる。産廃物には、有害物質が多数含まれ、水および土壌の汚染が危

惧されている。排出事業者の数は、一万社以上に及ぶという(写真③④⑤)。

環境浄化と環境共生の方策を立てるためには、超分野的な総合科学の知見を必要とする。これこそ総合政策学の好む対象だ。私は、青森・岩手両県の合同検討委員会委員長を引き受け、現在、同委員会において、社会的、技術的対策を鋭意検討中である。他方、岩手県は、この巨大産廃の不法投棄事件を契機に、「県外産廃物の搬入に係る事前協議等に関する条例」「産業廃棄物処理条例(新環境地域社会の形成に関する条例)」の三条例を制定した。

越境移動の抑止

産廃物の越境移動は、わが国だけの問題ではない。ニューヨークの産廃物が、ニュージャージーやペンシルベニアやバージニアに搬入され、ニューヨークとの間に摩擦を生じている。産廃物の多くが、先住民や保護民の地区へ搬入されることから、最近では、産廃物をめぐる状況は、環境問題から人権問題の様相を呈してきた。イギリスでも、



写真② 海から見た豊島。大量のゴミが白い防水シートに覆われている。

ロンドン市と周辺自治体との間に、産廃物の処理をめぐる深刻な争いが起きている。

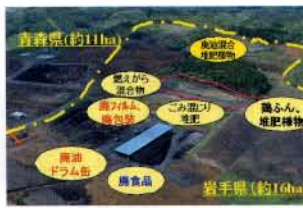
大量生産・大量消費の帰結
大量生産・大量消費の社会経済システムは、必然的に文明の排棄物ともいうべき大量の産廃物を放出する。だが、これまでは、産廃物の減量、再使用、再生利用などを回る「循環経済」は無視され、物の生産を重視する「動脈経済」の発展に力が注がれてきた。

産廃物を適正に処理するにはコストがかかる。処分場などの施設を確保することも困難だ。そこで、産廃物の越境移動が行われ、不法投棄が横行する。穴屋、一発屋、理め屋、見張屋など役割分担がなされ、その手口は、ますます巧妙化している。このため、産廃物の不法投棄、不適正処理、環境汚染、健康被害、処分場立地等をめぐる紛争が、全国各地で激化し、大きな社会問題となっている。

循環・共生・抑制の社会に



写真③ 首都圏の工場から排出された賞味期限切れ食品(地下約5mから)。



写真④ 現場全景(岩手県側)は多様な産廃物が原野に穴を掘ってグララの投棄。青森県側は沈腐に集中的に投棄。



写真⑤ 首都圏から持ち込まれた廃油入りドラム缶(地下約5mの所から218本発見。発ガン性物質トリクロロエチレン等が含有)。



写真⑥ 首都圏の印刷工場等から排出された包装用フィルム、廃プラスチック容器など(地下約5mから)。

産廃物をめぐる問題を根本的に解決するためには、最終処理という下流対策だけではなく、製造、加工、販売、消費などの上流対策をも含めた「産廃物の総合管理」が必要である。今までは、産廃物対策は、衛生の処理という見地からのみ考えられてきたが、これからは、人間の欲望を抑制し、経済と環境との共生を保ちつつ、産廃物ゼロをめざす「資源循環型社会」の形成に向けて、コンセプトの大胆な転換を固らなくてはならない。二十世紀は、「廃棄・相克・欲望」の世紀であった。二十一世紀の文明を開く鍵は、「循環・共生・抑制」の思想と実践でなければならない。それこそ、わが総合政策学部の重要な任務だ。

中東と私

西アジア農民との会話

勝藤 猛

私は1970年にアフガニスタン、1972年にイランと、2回、日本のある大学の西アジア農村調査隊に参加した。その際の調査法は、まる1カ月、村の中に住んで、なるべく現地語で農民と会話して、情報を得るというものである。調査といっても、権力を行使するわけではないから、村人のお客さんとして、いろいろ教えてもらうのである。ただし外国の農村を理解するには、自国日本のそれについてある程度の知識が必要である。

を思い出す。毎日、我々とさわやかに挨拶を交わし、村の中の自分の仕事をきびきびとこなしていた。社会的に十分なおとなの貫録があった。またある農民は、畦道で私と出会い、初対面の挨拶が終わると、いきなり籠の中からぶどうを1房取り出して私にくれた。

同国の他の村で、中年の農夫は、普段は遠慮してか、我々にあまり近づかなかったが、ある日、彼の家の前で偶然に出会い、1時間ほど立ち話をした。この村に滞した時期は夏の終わりの1カ月であった。「冬はどうして過ごすのか」という私の問いに、彼は「一帯が雪におおわれるから、家の中にじっとしているだけ」という。そしてまた「春は、このあたり一面、Hame-ja sabz(緑)になります」と。この表現を私は忘れられない。



道端に集う人々(アフガニスタンにて)。

この村の端まで来て隣村が見え出した。その時、彼は不意に村人たちについての内緒話を始めた。だれとかれとは仲が悪いとか、だれは昔はよかったのに落ちぶれたとか。農村社会の視線から解放された気ささからであろうか。

イランのある村でのこと。農民たちと雑談していたら、その中の一人が突然「今年はネズミの年」といった。1972年は確かに子(ネズミ)の年であった。「では来年は？」と聞くと、知らないという。12の動物から成るということは知っている。そのうち馬や羊はよい動物だから、その年は豊作、ネズミやヘビの年は悪い年だ、と。いわゆる十二支獣暦の痕跡が残っていることがわかった。イスラム教とは何か、というクマエではなく、イスラム教徒はどう生きているか、というホンネの一端を知り得たのは貴重な経験であった。

アフガニスタンのある村での青年

学生主催により 就職合格者経験談話会が 開催される

年の改まった二月二十九日(水)、今年度の就職活動と支援するために「就職合格者経験談話会」(主催/総合政策学部自治会、協力/総合政策学部就職委員会・メコン)が開催された。報告者は、熊谷純子さん(岩手県職、岩瀬竜太さん(江川市役所、新湯放送機)、花岡徹さん(対し)七十七銀行)の四名である。第一部は司会の高地一雅さん(三年生、自治会代表)を中心に四人の報告者の経験談と質疑応答。第二部は参加者が四人の報告者に対して個別に相談をするという内容である。また、一人でも多くの学生に就職意識を高めてもらうというねらいから、対象者は、学部を問わず三年生から一年生まで広く設定された。



第1部では、就職活動経験者4名の報告と質疑応答が行われた。

各自自己分析をし、自らを変えていく、「ウェブだけでなく足を使った活動」等々のアドバイスがなされた。また「卒業論文も就職活動と並行してやるべき」、「一般に営業職を嫌がる傾向があるが、それではだめ」といった厳しい指摘も入り、集まった学生はそれぞれ一つ一つにうなずきながら熱心に聴き入り、質問をしていた。

第二部は別室に移動して行われた。二十名弱の学生が残り(こ)でも二年生の姿が目立った。より個別具体的な相談がなされた。疲れているにも関わらず熱心に相談に応じる報告者に対して席を立つ学生は皆無。結局、予定時刻を一時以上オーバーした上、強制的に打ち切るに会を終了するすべはなく、盛況のうちに会は幕を閉じた。

平成十四年度卒論発表会 現実を学び、考え、まとめた 成果を発表



各会場には教員や4年生だけではなく、3年生も多数参加した。

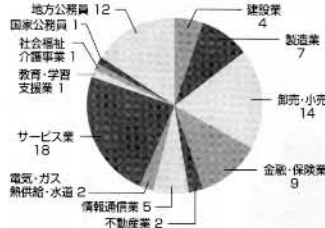
総合政策学部第一期生の卒論発表会が、二月七日、八日の両日に行われた。発表会は、「行政、経営コース」と「環境政策講座、および同コースの「地域政策講座」の三会場に分かれて実施。計百六名の卒論提出者のうち八十名が、ミニ学会よろしく研究成果の報告に挑戦した。本学部教員はもちろん、来年度は当事者になる三年生も多数参加し、先輩の発表に耳を傾けた。

この卒論発表会は、いわば卒論の審査会的な位置づけができる。しかし実際には、自分たちの関心とテーマとでまとめたものを、限られた時間内にわかりやすく、かつ的確に報告するという、社会人として求められるスキル(紹介)や、プレゼンテーション(説明)を、各自が工夫して行うことにも狙いが置かれている。

発表は口頭での説明に加え、パソコンのプレゼンテーションソフト(パワーポイント)で作成した内容を画面に投影する方法や、OHPで投影する方法、

資料を配布する方法、及びそれらを組み合わせた方式である。ほとんどの学生は、コンピュータ操作を学習し、表やグラフなどを自由に組み合わせられるパワーポイントを用いている。これも、社会に出ると職場で求められるコンピュータ操作に直結した技術応用であるといえる。

卒論題目は本学部のホームページで公開する予定なので詳細はそちらに譲るが、総合政策学部らしく、政治、行政から経営・経済、国際、環境、地域、教育・スポーツなど、社会のさまざまな側面に関連し、現場や実際の問題に関係したテーマの卒論が大半であった。



平成十四年度の就職状況
卒業生で進路が決定したのは、三月末現在で九七名である。内訳は、就職が七十六名、進学が八名、その他が十三名である。就職者の産別内訳は、建設業が四名、製造業が七名、卸売・小売業が十四名、金融・保険業が九名、不動産業が二名、情報通信業が五名、電気・ガス・熱供給・水道が二名、サービス業が十八名、教育・学習支援業が一名、社会福祉・介護事業が一名、国家公務員が一名、地方公務員が十一名である。

たとえば「地域政策講座」では、一人あたり二十分の時間で、二人分の報告、八分の質疑応答が行われた。

発表は口頭での説明に加え、パソコンのプレゼンテーションソフト(パワーポイント)で作成した内容を画面に投影する方法や、OHPで投影する方法、

資料を配布する方法、及びそれらを組み合わせた方式である。ほとんどの学生は、コンピュータ操作を学習し、表やグラフなどを自由に組み合わせられるパワーポイントを用いている。これも、社会に出ると職場で求められるコンピュータ操作に直結した技術応用であるといえる。

卒論題目は本学部のホームページで公開する予定なので詳細はそちらに譲るが、総合政策学部らしく、政治、行政から経営・経済、国際、環境、地域、教育・スポーツなど、社会のさまざまな側面に関連し、現場や実際の問題に関係したテーマの卒論が大半であった。

昨年年度にもまして今年度の卒論発表会は、四年間の総まとめにふさわしいテーマと学習・研究成果の発表の場であった。

卒論題目は本学部のホームページで公開する予定なので詳細はそちらに譲るが、総合政策学部らしく、政治、行政から経営・経済、国際、環境、地域、教育・スポーツなど、社会のさまざまな側面に関連し、現場や実際の問題に関係したテーマの卒論が大半であった。

昨年年度にもまして今年度の卒論発表会は、四年間の総まとめにふさわしいテーマと学習・研究成果の発表の場であった。



第2部では、報告者がこれから就職活動を行う学生の相談に熱心に応じた。

英語に新カリキュラム導入

1年生は年2回トフルを受験

佐藤 智子

21世紀の社会を舞台にして活躍する学生を育てることを常に念頭に置いている総合政策学部では、教員は機会ある毎に学生に英語の必要性を説いています。その一つの具体的な表れとして、平成11年度から学部独自でTOEFL (Test of English as a Foreign Language: 英語を母国語としない人の英語能力を測る試験)を実施しています。学部棟の演習室には、語学の練習ブースやTOEFL, TOEIC (Test of English for International Communication: 国際コミュニケーション)、英語検定の教材を数多く配備し、学習環境も整備しています。学部によるこれらの努力は学生のトフルのスコアが伸びていることや、数カ月アメリカやイギリスの大学に語学研修に出かける学生が現れるようになった点に結実しています。

さて、平成14年度の新カリキュラムの導入にともない、大学全体の英語教育も大きく変わりました。新しい試みの一つめは、習熟度別クラスにしたことです。新入生全員にオリエンテーション初日にトフルの受験を課し、そのスコアによってクラスを20に分けました。これまでは英語の能力が異なる学生が一つのクラスに混在していましたが、だいたい同じレベルの学生を集めてクラスを編成しました。その結果、学生は到達目標を明確にすることができ、モチベーションが高まりました。1年次生には後期末近くの2月にも再度トフルを課し、そのスコアに応じて来年度のクラスを再編成します。変革の二つめは、少人数教育が実現したことです。これまでは50~60人規模のクラスで授業を行っていましたが、それを25人以下にしました。個々の学生へのきめ細かい指導が可能となり、不合格者および授業放棄者の数が激減しました。

学部の語学演習室では、衛星放送やミュージック・チャンネルも聴くことができます。語学力向上の入り口は、音楽、映画、政治、経済、環境問題など個々の学生の興味や関心に応じて千差万別です。しかし、いったん建物の中に入ったからには、目的の場所に到達するためには歩き続けなければならない。不断の努力の結果、ある日、これまで足を踏み入れたことのないような部屋にたどり着いた喜びを多くの学生に実感してほしいと思います。新しい部屋の住人となった学生たちは、通った自己を発見するでしょう。



学部の語学演習室では、衛星放送やミュージック・チャンネルも聴くことができます。

蜜柑の皮

「... そういう考え方をすれば、不思議は色濃くなるばかりです。しかし、殺人が行われたからには、犯人がいらなかったはずはない。波越さん、あなたは「蜜柑の皮をむかないで中身を取り出す法」というのをご存じですか。高等数学の教式上では、それが可能なのです。つまり、この犯罪は、中学などでは教えない、高等数学に属するものかもしれませんね」

—— 江戸川乱歩『魔術師』より

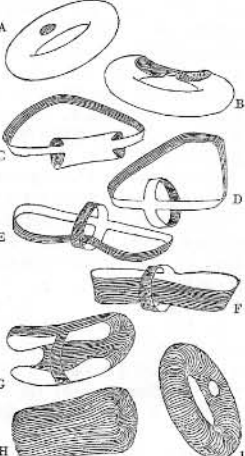
幾何学の一分野に「位相幾何学」というものがある。身近な例では、「一筆書き」の遊びや、「メビウスの帯」(これは裏と表の区別のつかない帯である)などが、

位相幾何学のわかりやすい題材である。あるいは、「クラインの壺」というものもある。こちらは内側と外側の区別のつかない壺である。

「位相幾何学」とは、ひとことで言うと、ゴムでできた図形の性質の研究である。図形が、現実にはありえないほどの伸縮自在の理想的なゴムでできているとして、その形をグニャグニャと自由に變形できるものとしよう。クラゲかタコのようなグニャグニャの柔らかな図形を想像するのは禁止する。ゴムでできた図形Xをグニャグニャ變形すると、大きさや長さが変わるため、見かけ上別の図形Yが得られるが、図形Xと図形Yとは、本来、「同じもの」のはずである。したがって、變形で不變のままに保たれている、

ある共通の性質を有しているはずである。この變形不變な性質(=位相的性質)を研究するのが「位相幾何学」という数学である。位相幾何学は20世紀に大発展した数学の分野であるが、その端緒は、17世紀の万能学者ライプニッツの構想にまでさかのぼるといわれている。

図形が伸縮自在の理想的なゴムでできているとする「位相幾何学」の立場からすれば、常識的には一見すると不可能に思える變形が数学的には可能になることがある(これを利用して手品の種とすることも)。位相的變形の実例を右図に示す。この図は、タイヤのチューブを裏返しにする手順をA→B→C→D→E→F→G→Hの順序で表わしたものである。元のチューブは、表が白、裏が黒(筋目がいっている)の色をしているとする。このチューブは、伸縮自



在のゴムでできた思想上のチューブであり、その一個所には穴が開いている(この穴の大きさも自在に伸縮する)。出発点の図Aでは、チューブの外側の色は白であるが、終着点の図Iでは、チューブの外側の色が黒になっている。想像力を働かせて、手順をたどってみよう。

最後に驚くべきことをお知らせしよう。1979年に、B. モランという数学者が、何と、「球面を裏返しにする」手順を発見したというのである(モランの球面も、明智小五郎の蜜柑の皮も、タイヤのチューブの場合とは異なり、「穴の開いていない」球面を扱っていることを付記しておく)。(数之久作)

図は、J. R. ニューマン他編「空間についての数学」(東京図書)より。

「一冊の本」

沼田 俊昭

マンガでは、「ブレイク・ポイント」おれは鉄平」などが面白い。全巻揃えたが、引越したとき散逸してしまっただけで、人生の節々に自分の生き方を確認出来る本、なにげなく手にし感銘を受けた本など多数に及ぶ。



「わがいのち月明に燃ゆ」

「戦没学徒の手記」(林尹夫著、筑摩書房)である。

内容は、三高、京都帝国大と進んだ華者が学徒出陣し、昭和二十年七月四国沖で月明の空に散華する、十八歳から二十一歳までの日記である。



そこには、たまに訪れる休日にかまへ帰るや書齋にかけたる姿、原書をパラして航空隊のトイレの中で読んだこと等が記されている。

彼は、戦争という非日常の中にあつて、無心に探求出来る世界を持っていた。苦悩や挫折もあつたが、若くしてお金や地位といった世俗的価値に囚われな

私がこの本に出会ったのは、就職先は全く不透明という大学院生の時である。それだけにこの本の印象は強烈なものがあつた。

やがて就職出来た時、学生に貸し出したこの本は、行方不明となつた。今あるのは、神田の古本屋で再度求めたものである。

学生諸君、人生にはさまざまな生き方がある。いかなる職に就き、いかに生きるべきか考えてみたい。お金があつて、しかも晴れた休日、日がな一日読書を試みればどうか、自分の人生に示唆を与えるもう一冊を見つけたために。

あのころの、と

天野 巡一

「遠い地平線が消えて、ふかふかとした夜の間に心を休める時、はるか雲海の上を音もなく流れる気流は、たゆみない宇宙の営みを告げています。満天の星をいたくはてしない光の海を、ゆたかに流れゆく風心に開けば、きらめく星座の物語



東京の13年ぶりの大雪に同僚と(昭和42年2月)。

も聞こえてくる、夜の静寂(しじま)の、何と醜骨(しごつ)なことでしようか。光と影の境に消えていったはるか地平線も輪に浮かんでまいります」と「ミスター・ロンリー」の音楽にのって、城達也のナレーションで、いまの深夜放送音楽番組の「ジェッツ・トストリーム」にトランジスタラジオのボリュームを下げて聞き入っていた昭和四十二年頃。

今も時々深夜にこのナレーションではじまる音楽を、資料などの整理をしながらCDで聞いています。今の單身生活に当時は世間の煩わしさを解放されたひとときを楽しみながら生活しています。

私はたまたま目的もなく、漠然と地方公務員の試験を受けた。合格したので就職しました。が、本当にこれであつたのか、自問自答の毎日でした。その時、深夜ラジオ放送の番組が安らぎを与えてくれました。

この時期、成蹊大学(当時)の佐藤先生、法政大学の松下主一先生がマスコミに登場して、「地方自治」論を主張して、地方自治論が盛んになりました。いまでは住民自治、地方分権など当然のことであるが、この時期は国からとらえた地方自治論だけではない。住民の視点から見た自治論があつたのか、学問になるのかと、愕然としたことを記憶しています。

いままで当然として見過ごしていたことを基本から調べてみると、そこには必然性がなかったり、曖昧で証明されていない内容があることがわかり、先輩や友人に議論をもちかけ、ときには徹夜で議論したことも知らずの小生急ぎな青年で、武闘派「地方(福泉)病患者」と友人に押込まれていました。

紛争、議論を厭わない姿勢を買われ、自治体政策をめぐる訴訟を十年以上担当しました。訴訟にいたるまでの経過は膨大な事実をあらゆる法律、政治家などを検索するうえに照合をはかることが必要になってきます。自治体政策の正当性を主張するため、文献さがしに走り回り、「法令総覧」と首つ引きで事実との照合作業などで精進していました。

訴訟担当の経験のなかから自治体政策の多様性、重要性などについて、実務のフィールドを通して、住民、自治体からみた法律、制度論を主張してきました。この考え方を私は「政策法務」とよんで、自治の現場からの理論を提唱しています。

地方自治は人間のくらしを中心に政策を立案、展開を住民の視点からはかり、福泉から現場まで」と人間の一生が領域とされ、星になつて、「大変広いその領域となつていくことは青年時代からの議論と現場での緊張のなかから経験的に体得したものです。

平成十五年一月二十九日(水)、午後一時から、県立大学講堂において、総合政策学部学術振興委員会主催による「これからの議会及び議員のあり方」シンポジウムが開催されました。

日本行政学理事会長で中央大学政経学部の今村都南准氏の基調講演「これからの議会及び議員のあり方」の後、本学部の田島平仲助教授をコーディネーターに、榎本真矢市議会議長官沢昭夫氏、「筆石を語る女性の会」代表嘉藤くに子氏、本学部の高橋秀行助教授をパネリストに迎え、「これからの議会及び議員のあり方」についてパネルディスカッションが行われた。

「統一地方選挙」を控えていることもあり、市町村議会議員をはじめとするおよそ三百名の参加者があつた。テーマ「この関心の高さを感じさせるシンポジウム」となつた。

第一部「基調講演」における今村都南准氏の主張は、次の三点にまとめられることができた。

「議会は設置、ただし議員は無給」という観点から、市町村合併を前にして、議会及び議員は議会制民主主義におけるその役割をあらためて考え直して見る必要があるということが指摘された。

第二部「パネルディスカッション」終了後、数名の議員が手を挙げ、反論が展開された。しかし、議会及び議員の現状についての認識は自己肯定的なものにとどまり、問題意識の共有にずれがみられた。議会の活性化をさまざまな議員に対する有権者の目から見ていく必要がある。

「基調講演」終了後、数名の議員が手を挙げ、反論が展開された。しかし、議会及び議員の現状についての認識は自己肯定的なものにとどまり、問題意識の共有にずれがみられた。議会の活性化をさまざまな議員に対する有権者の目から見ていく必要がある。

第三部「パネルディスカッション」においては、官沢昭夫氏が、これまで取り組んできた会議規則の改正や議員準備を中心とするが、議会を活性化するためのさまざまな試みを紹介した。嘉藤くに子氏は、「筆石を語る女性の会」をどのように経緯で設立したのかを紹介しながら、血縁、地縁にとらわれてしまっている選挙と地域政治をいかにして開かれたものにしていくのかについて持論を展開した。

高橋助教授は、議員立法や議会への市民参加の現状について具体例をあげながら、議会の活性化にむけてのさまざまな取り組みを紹介し、官手県での取り組みを紹介した。

「基調講演」終了後、数名の議員が手を挙げ、反論が展開された。しかし、議会及び議員の現状についての認識は自己肯定的なものにとどまり、問題意識の共有にずれがみられた。議会の活性化をさまざまな議員に対する有権者の目から見ていく必要がある。

「議会は設置、ただし議員は無給」という観点から、市町村合併を前にして、議会及び議員は議会制民主主義におけるその役割をあらためて考え直して見る必要があるということが指摘された。

おじやまします「田島平仲助教授の研究室」の巻 地方自治もスポーツもそれぞれの役割意識あつてこそ



研究室の下のすぐ脇に、カ月のスケジュールを書き込む大きなホワイトボードがかかっていた。「今はまだ白では良し。黒だったからね」と、この部屋の主・田島先生は言う。市町村合併の特例に関する法律「合併特例法」の期限が二年後に迫っているなか、行政学・地方自治・政治学の専門家である先生のもとには、各自自治体で行われている協議会やシンポジウムなどへの参加、講演依頼が後を絶たない。最も多い時で週に二、三回。その行き先は県内はもとより宮城県などへも及ぶ。

「社会が変化する中で合併は必然のなりゆき。行政は、住民と相談するチャンネルをどうやって作っていくか考えている。あとは市民レベルの議論がもっと盛んになれば、自己決定・自己責任の原則は地方自治にも当てはまる。つまり大切なのは住民が主体的に動くことであつて、合併をするのではない。これからの社会のあり方を私たち自身が真剣に考えなければならぬ」と先生は語るのだ。その思いは、地方自治論、行政学論という担当の講義を引用しながらの講義は、地方自治のあり方を学ぶうえで、また私たちが暮らす地域を見つめるうえで興味深く、貴重なものだ。

「本校の開学の目的も、そもそもは地域の主体を作ることだつた。だから昔にもっと地域への関心を持ってほしい」と、先生は参加志向の学生のさらなる受講も期待している。

こんなにも多忙でありながら、実は田島先生、野球部・水泳部・バドミントン部の部長も兼任しているというから驚く。何かをやり遂げる達成感を知ることは後々人生の上でプラスになると、学生の指導にも熱が入るが「団体スポーツは一人ひとりの役割意識が大事なんだ」と、部の運営のコツを語る言葉には、先生の読く二十一世紀の協働型社会の形が見えている気がした。



田島平仲助教授

MONTO

岩手県立大学
総合政策学部ニュース
Iwate Prefectural University
第9号2003.4.7
本誌は100%再生紙を使用しています。

(MONTO WEB版)
http://www.poly.iwate-pu.ac.jp/monto/
*岩手県立大学のホームページ http://www.iwate-pu.ac.jp/ から
総合政策学部をクリックして、次にMONTOをクリックしてもアクセスできます。



幸丸 政明

キャンパスの北側に広がる森林公園は、本学の裏庭のような存在ですが、ここで比較的良好に見かけられる哺乳類の一つがノウサギです。日本にはエゾノウサギ、アマミノクロウサギ、ユキウサギ(エゾユキウサギ)としてノウサギ(ニホンノウサギ)の四種のノウサギが生息していますが、エゾノウサギとアマミノクロウサギは、耳の長いいわゆるノウサギとは分類学的に異なるグループに属し、その生息域はそれぞれ北海道中央部の山地、奄美諸島の一部に限定されています。この二種は北海道、ニホンノウサギは本州から九州までの林や草原に広く生息しています。この二種は分類学上同属ですが、エゾノウサギの方はユーラシア一

帯に生息するユキウサギの一種とされ、一方ニホンノウサギの方は日本の固有種とされている。トウホクノウサギ、キエウシノウサギ、ササノウサギ、オキノノウサギの四つの亜種に分けることもありますが、四つの亜種への分類はともかくとして、東北、日本海側の積雪地帯の個体は冬に毛色が白くなり、積雪の少ない地方では一年を通じて体毛は褐色のままという顕著な地域的変異がみられます。当然、このあたりにはノウサギは体色が変化するタイプで、二月下旬ごろまでは耳の先端を除き真っ白で、その後春の光とともに褐色に変化し始め、雪が消え林の下草が萌え出る頃にはすっかり夏毛に変わります。ノウサギの姿は低木が葉を落とした見通しの利く時期には比較的よく見かけますが、雪のある時期は、直接姿を見るだけでなくその上に残された大変特徴的な足跡でその動きを辿ることが出来ます。ノウサギの仲間にはビョンビョンと形容されるように跳ねて移動しますが、その時左



写真提供: (財) 自然環境研究センター

右の前足は前後にずらして着地し、大きな後足は揃えてその前に置かれるので、下の部分で離れたVの字の後に二つ点がついたような足跡がつかめます。この足跡を丹念に辿ることによってその個体の行動圏を把握することが出来るのですが、そうした

調査によると単独で生活し一頭一頭の行動圏は十〜二十ヘクタール程度だそうです。繁殖期には雌雄の行動圏は重なるので、森林公園には二〜三つが一つのノウサギが生息している可能性が非常に高くなります。

繁殖は年数回、一回に一、二頭出産し、生まれた子供はほぼ一カ月で独立し、生後八〜十カ月で成熟するので、翌年から繁殖できるようなります。このような高い繁殖力と反比例して寿命は短く平均一歳余り、出生個体の五十〜八十%は一歳未満で死亡してしまうようです。ノウサギの死亡原因の主なものは猛禽類やキツネ、テンなどに捕食され人間による狩猟ですが、森林公園では狩猟はもとも行われませんし、ノネコ以外の捕食者は定住していません。この点から考えると、ノウサギの生息が維持できているとしたらどのような仕組みが働いているのでしょうか。

カラマツ林 無届けデモ事件の謎

モント事件簿(最終回)

「この最高の御馳走は窓の外の岩手山の景色なのにあのカラマツ林が邪魔だ、見通しが悪いとパトロールの際に気を付けなきゃならんし、いっそ伐ることを提案しよう。ある日、大学食堂で窓の外の景色を眺めながら食事していた本官銭形モントが、こう独り言を申しますと、隣りにいた見慣れない教授二人が、本官をジロリとキらみつけました。そして、いきなりタスキうどん(そんなメニューありませんか)を喰らった教授は「あれは我らの宝庫ですぞ」と、妙なことを言っていました。

その夜、カラマツ林付近を巡回中の本官は、突然「伐るな、伐るな」という大勢のシブレヒコールに驚かされました。無届けデモではありましたが、多勢に無勢、やむを得ず彼らの宣言文なるものを受け取り、本官早々に退去したのであります。



翌日、宣言文なるものを読みますと「カラマツ林はここが畜産試験場であったこの防風林で、今も役に立っているし、野生生物が通る回廊すなわちコリドールというものでもあり、ぜひ残すべきである」という内容でありまして、本官もなるほどと思ったのであります。昼に学食である二人の教授にまた会いましたので、例の宣言文を見せ「納得したので、カラマツ林を伐採せよとは申しぬことには」と話すと、二人は嬉しそうに「コリドールが残ったか」と笑うや、不思議にも姿が消えました。食卓に置いていた宣言文も消え失せ、林の大きな葉が散っておりまして、あれは「狐狸(こり)」であり、「木、常に大切なもの」であり、「一たび抜きタカラマツ」であったのかと気づき、ようやく本官にも彼らの正体がわかりました。が、この一件の報告をとなも信じてくださらぬのが、本官の誠に遺憾とするところであり、もうこんな変な事件はコリ(こり)であります。

GIS(地理情報システム)って何? 佐野 嘉彦

GIS (Geographical Information System) は、お絵描きソフトとデータベースを組み合わせたようなものです。といっても「何だそれ?」といわれまぬ。もうちょっとわかりやすく説明してみましょう。地図上の線は川であったり、道路であったり、何かの境界線であったり、単なる線ではありません。すべて情報(属性)がついています。線や図形だけでなく、その属性も含めてコンピュータ上で管理しようとするのがGISの1つの機能と考えてください。例えば、線に対しては、道路だよ、道路だよ、と説明してあげているのだと考えてもいいでしょう。GISでは何枚ものレイヤー(シートのようなもの)を重ね合わせて地図を作りあげます。レイヤーには図形と属性が含まれており、すべての地図情報を1つのレイヤーに入れることも出来ます。しかし、GISを管理、利用する人間側は複雑になると大変なので、土地利用だけ、交通網だけ、というレイヤーで別々に管理し、重ね合わせて管理の方がわかりやすいのです。

さて、ここで既にあるGIS上の地図に、自分で作った新しいレイヤーを重ね合わせることを考えてみましょう。盛岡の地図の上に、観光スポットのレイヤーを重ね合わせると、観光地図ができあがります。この機能はとても便利です。例えば、今までは一緒に議論しづらいことを、地図に載せられる情報を中心に、各自が新しいレイヤーを持ち、地図の上で重ね合わせれば、新しいものが見えてくる可能性があります。ある人は歴史的な建造物のレイヤーを持っていて、ある人は新しい道路の計画図のレイヤーを持っていて、また、ある人は貴重な生物の分布のレイヤーを持っています。この人たちが、集まってレイヤーを重ね合わせることで、新しい道路は、貴重な建造物のある場所を通らないかを判断できます。もちろん、人口分布のレイヤーや住宅のレイヤーなども重ねれば、その道路の必要性の議論も同時に出来ます。これはまさに私たちの学部・総合政策学部で行っている研究内容が容れとつくり、いろいろ学問分野をつつと、それがGISです。



写真はGISとGPS (Global Positioning System: 人工衛星から送られてくるデータで自分のいる位置がわかるシステム)を組み合わせて作業を行っているところ。



岩手県内で働いている者も六〜七人はいらる。県庁職員二人、国家公務員三名、電力会社一名、等々。ゼミOBの活躍の場を風で開いたという、人事異動の通知で聞いた「はつ、また肩書が変わった」と言っながら、教師をしていてよかったなあと思えることが最高の幸せです。

第九回
お宝拝見!
二百五十五名のゼミ生

地主 豊

お宝ですか。人様にお見せできるようなものは持っていない。ま、お宝にいいや、あるといえは、これかな。私が死んだとき、お棺に入れてほしいといいたいの、それがお宝といえは、お宝です。それ、何かかって? 写真だけでもいいよ。わかんないと思えますが、ちょっと説明させてもらいます。

私が前任校ではじめて教師になったのは今から三十五年。前任校でゼミ(演習)を担当し、それから三十四年間在職して、二百五十五名のゼミ生を送り出した。四年生になったときに、全員が「就職票(一)

通」というものに記入して、一通は学部保管、一通はゼミ担当教員が保管するというのがその大学の方式。現在、私の手元には、変色した二十歳過ぎの写真が貼られている就職票がすべて保管されている。写真の撮り物はこれです。

正確にいえば、就職票自体がお宝なのでなく、二百五十五名のゼミ生がオ宝といいたほうが正しい。で、ゼミ二十周年、三十周年という集まりがあったが、そのときの集まる写真は、教師がおりたの頃に教えただけで、今は私よりも老けて、白髪頭、禿げ頭がそろそろ出てきた。分合の二百五十五名のうちの三分の一は、民間企業で、行政機関、金融界、民間企業に勤務して、四十歳以上の上者になっている。これだけの組織で幹部になっている。

●編集後記

▼二期生が果立っていきました。MONTO第9号はお届けしました。テーマは「環境」課題は「取り組む」です。「ワーキングホリデー」In 佐野は、地域の人のための農作業や予約などを通じて、遠野の「環境」を学び、その成果を地域に還元しようという取り組みです。▼座談会では「環境」課題に取り組む学生たちを取り上げています。対象は、それぞれ異なりますが、いずれも現場に根ざしたアプローチが特徴的といえます。

南教授の「研究最前線」では、産産問題を取り組む生たちの現地調査や、岩手県青森県境での産産問題への取り組みととも、資源循環型社会を実現する上で、総合政策の役割に於ける。▼第8号「キャンパスの島たち」のカルガモの写真は、鈴木祥悟氏が撮影したものです。この地にて追加したいです。

●編集責任者: 斎藤利明
●編集委員: 斎藤利明、岡田健史、藤田健一、阿部晃士、佐野嘉彦、藤田義裕